

令和 6 年 9 月 11 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10474

研究課題名（和文）ヘルスケア教育のための「子ども健康手帳」の開発

研究課題名（英文）Development of "Children's Health Handbook" for Health Care Education

研究代表者

服部 淳子（HATTORI, JUNKO）

愛知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：70233377

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、子どもが発達段階に応じて健康状態を把握し、管理し易くするためのコンテンツを明確にし、それを重要度に応じて第三者に伝えるための構造を明確にする事である。そして、明確にした内容を組み込んだ「子ども健康手帳」を開発することを目標とし、そのためのデザインと使用によるフィードバックを繰り返し行い、完成度を高めると共に効果的なヘルスケア教育システムの構築を行う。まず、養育者のヘルスケアに関する課題・現状を調査し、子どものヘルスケアに必要な項目と教育内容を明らかにしたうえで、デバイスとしての「子ども健康手帳」を開発した。開発した「子ども健康手帳」を使用してもらい、内容や実用性を評価し、完成とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子ども健康手帳を用いて、継続的にヘルスケア教育を行うことによって、子どもであっても、発達段階に応じて、自分自身の健康に興味を持ち、自らが健康行動や健康管理が行えるようになる。子どもが、主体的に健康管理ができ、必要に応じて振り返ることができ、自分の既往歴や予防接種歴などを含む健康状態を的確に第三者に伝えることができる。この手帳を活用することによって、ヘルスケア行動を獲得し、成人に至るまでの予防接種歴、既往歴等を含めた健康管理ができる。さらには、小児看護で課題となっている先天性疾患を持つ子どもたちの移行期支援にも役立つと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the content that will make it easier for children to understand and manage their health conditions according to their developmental stage, and to clarify the structure for communicating this to third parties according to the level of importance. The goal is to develop a "children's health handbook" that incorporates the clarified content, and to repeatedly provide feedback from design and use to improve the handbook's completeness and build an effective health care education system. First, we investigated the issues and current situation regarding caregivers' health care and clarified the items and educational content necessary for children's health care, and then developed a "children's health handbook" as a device. We had participants use the developed "children's health handbook," evaluated its content and practicality, and completed it.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児 ヘルスケア 子ども健康手帳

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1999年に日本看護協会から「小児看護領域でとくに留意すべき子どもの権利と必要な看護行為」が提示され、プレパレーションが広く行われるようになった。プレパレーションは、心理的準備と訳され、治療や検査を受ける子どもに対し、認知発達に応じた方法で説明を行い、恐怖や不安を最小限にし、子どもの対処能力を引き出すこととされている。プレパレーションは各施設で行われているものの、共通使用可能なプレパレーション・ツールはなかったことから、申請者は、基本的なプレパレーション・ツールの開発に着手し、入院に必要な12ツールを作成し、効果を検証し、Web上に公開、無料ダウンロード・システムを構築した。

プレパレーションの実施により、子どもは、認知発達に応じた説明を受け、病気や治療目的を理解した上で、検査や処置を受けられるような環境は整ったが、親の意向によっては、説明を受けないまま、検査や処置が行われることも多い。子どもであっても、小さい頃より、自分の健康状態に関心を持ち、発達段階に応じた健康管理を行うことができれば、自分の病気や治療内容・目的を知りたいと望むようになると思われる。そうすることによって、現在行われている医療者主導のプレパレーションではなく、子どもの要求に応じた子ども主導のプレパレーションが実施されるようになるべきと考える。

生後から子どもの健康の記録・管理は、母子保健法に定められ、母子健康手帳で母親とともに管理されている。母子健康手帳では、母親のみならず、子どもの成長・発達、予防接種歴や既往歴などの健康管理が行われている。そのため、ほとんどの子どもは自分の成長・発達の過程や健康状態を自分で把握・管理していない。

子どもが発達段階に応じて、健康教育を受け、ヘルスケアに関する知識や行動を習得できるようになるためには、子どもが自分の健康を管理できる媒体が必要である。そこで、子どもの認知発達に応じて、経過を追って健康に関する記録ができ、主体的に健康管理ができる「子ども健康手帳」の開発が必須であると考えた。子ども自身が、「子ども健康手帳」に記録し、管理することによって、成長・発達の経緯、予防接種歴、既往歴などの健康情報や食習慣や清潔習慣の習得状況など生活習慣にいたる健康状態を把握することができるようになる。その結果、子どもがヘルスケア行動を獲得し、自ら健康管理できるようになると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どもが発達段階に応じて、健康状態を把握し、記載し易くするためのコンテンツを明確にし、それを重要度に応じて第三者に伝えるための構造を明確にすることを目的とする。そして、明確にした内容を組み込んだ「子ども健康手帳」を開発するとことを最終目標とする。そのためのデザインと使用によるフィードバックを繰り返し行い、完成度を高めると共に効果的なヘルスケア教育システムの構築を行う。これにより成長・発達歴、予防接種歴、既往歴などを含めて健康状態を把握した上で、ヘルスケア行動を行えるようになることを考える。

3. 研究の方法

研究1【子どものヘルスケア教育に必要な要素の抽出・子ども健康手帳のコンテンツの明確化】

1) 幼児に対する健康教育・健康管理の実態について調査し、ヘルスケア教育に必要な要素を明らかにする。

(対象) 保育園、幼稚園に勤務する保育士・幼稚園教諭 30名、幼児の母親 200名

(方法) 保育士・幼稚園教諭を対象に、園での健康教育・健康管理について、質問紙調査を行う。内容は、文献検索をもとに作成した健康管理・ヘルスケア教育・健康習慣に関する実態調査と、自由記述による、ヘルスケア教育に関する不安や困難についての調査である。その結果から、子どものヘルスケア教育に必要な要素を抽出する。

2) 抽出した要素を基に、「子ども健康手帳」のコンテンツを明確にする。

(方法) 1)の結果から、ヘルスケア教育内容・方法を検討し、その媒体としての「子ども健康手帳」に必要なコンテンツを抽出する。その後、養護教諭、小児看護師からなる専門家会議を開催し、抽出したコンテンツを検討し、決定する。

研究2【「子ども健康手帳」のデザイン化、評価・修正】

研究1の結果をもとに、表現要素をデザイン化し、「子ども健康手帳」を試作する。その後、専門家会議を開き、試作した「子ども健康手帳」について検討し、評価、修正を行い、「子ども健康手帳」を完成する。

研究3

【「子ども健康手帳」を用いたヘルスケア教育効果の検証、「子ども健康手帳」の完成】

1) 研究2で試作した「子ども健康手帳」を用いてヘルスケア教育を行い、「子ども健康手帳」の効果について調査する。

(対象) 保育士・養護教諭 20名と保護者 100名。

(方法) 上記対象に対し、「子ども健康手帳」を用いたヘルスケア教育についての質問紙調査を

行う。質問内容は、「子ども健康手帳」使用後の、子どもの健康に関する認識、行動などと「子ども健康手帳」そのものの評価についてである。

2) 1)の結果をもとに、専門家会議を開き、「子ども健康手帳」の評価、修正を行い、「子ども健康手帳」を完成する。

3) 1)の結果をもとに、専門家会議を開き、効果的な「子ども健康手帳」使用マニュアルを作成し、ヘルスケア教育システムを構築する。

4. 研究成果

研究1 【子どもの健康管理、健康教育の実態調査】

1. 対象：A県内の保育園、幼稚園（以下、保育園）に通う2～6歳の子どもを持つ保護者437名

2. 期間：2018年8月～9月

3. 方法：研究協力で承諾の得られた3園に、調査票の配布を依頼し、保育園内の回収箱で回収した。調査内容は、発達や健康記録の管理方法、健康教育内容等であり、4段階リッカート尺度で調査し、自由記述でも意見を求めた。

4. 倫理的配慮：研究の目的、方法、協力の自由等を書面で説明し、投函により同意を得た。なお、A大学倫理審査委員会の承認を得た。

5. 結果

質問票の回収は299部（回収率68.4%）であった。回答者は、ほとんどが母親で、調査対象の子どもは、男児146名（48.8%）、女児152名（50.8%）、年齢は、年少組116名（38.7%）、年中組85名（28.4%）、年長97名（32.4%）であった。

1) 健康診査・成長発達の記録：

健康診査の記録については、「配布物をそのまま管理」が150名（50.0%）であり、次いで「確認のみ」128名（42.9%）で、「母子健康手帳に記録」は、16名（5%）であった。身長・体重の記録は、「園の配布物を管理」が199名（66.6%）で最も多く、「母子健康手帳に記載する」が52名（17.6%）で、「確認のみ」が42名（14.0%）であった。小児期感染症歴は、「母子健康手帳で管理」が121名（88%）が多かった。

2) 受診時・予防接種時の説明

受診時では、「病院に行くことと目的を説明している」は、288名（96.3%）であったが、予防接種時は、「病院に行くことと目的を説明している」は、243名（81.2%）で、「病院に行くことのみを説明している」は42名（14.0%）であった。

3) 受診結果・予防接種の説明内容

受診結果の説明では、「病名と治療内容、必要性を説明している」が243名（81.3%）であったが、予防接種では、「予防接種名と必要性を説明している」は114名（38.1%）で、「何も話していない」が47名（15.7%）であった。

6. 考察

これらの結果より、園での健康審査や発達の記録・管理が十分に行われていないことが明らかとなった。また、既往歴等の記録・管理についても、小児期感染症既往歴は記録されているものの、それ以外の疾病については、管理されていないことが明らかとなった。

また、予防接種については、80%が説明していたが、20%は注射をすることを説明しておらず、必要性などについても説明しているものは、40%と少なかった。受診内容や治療について説明しているものは80%で、20%は説明していなかった。

これらの結果より、入園後の健康や発達の記録・管理が十分に行われていないことが明らかとなった。この結果を基に、「子ども健康手帳」の内容について検討し、成長・発達の記録、身長・体重・歯の推移、予防接種、薬、既往歴、アレルギーの項目を作ること、疾病予防、健康の維持・増進についての教育内容を含めることとした

研究2 【「子ども健康手帳」のデザイン化、評価・修正】

子ども健康手帳は、幼児から思春期まで使えるようなデザインとし、表紙は幼児期、学童期以降、性別により使い分けできるように3種類作成し、カバーを付け、差し替えられるよう工夫した。大きさは、携帯に便利で記入しやすいA5サイズとした。



研究3 【「子ども健康手帳」の有効性の評価】

1. 対象：A県内の幼稚園に通う2～6歳の子どもを持つ保護者

250名と、保育士・幼稚園教諭40名

2. 期間：2019年8月～11月

3. 方法：研究協力で承諾の得られた3園に、保護者と保育士への調査票の配布を依頼し、保育園内の回収箱で回収した。調査内容は、保護者へは、「子ども健康手帳」に対する子どもの興味・程度、内容の理解度等で、保育士へは、「子ども健康手帳」の園での活用性等である。4段階の

リッカート尺度で調査し、自由記述でも意見を求めた。

4．倫理的配慮：研究1と同様の手順で、A大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

5．結果

対象は、保護者104名（回収率41.6%）、保育士・幼稚園教諭14名（回収率35.0%）であった。手帳を使用した子どもの性別は、男児55名、女児50名で、2歳児組13名、年少組35名、年中組30名、年長組27名であった。保育士は、すべて女性で、12名が保育士・幼稚園教諭で、年代では、50代が5名、40代4名であった。

1) 保護者の「子ども健康手帳」に対する評価

「子ども健康手帳」に対する子どもの興味については、約50%があり、ややありであった。年齢別にみると、3歳児において、興味あり、ややありが多くなっていた。「子ども健康手帳」の活用可能性については、約70%があり、ややありであった。年齢別にみると、5歳児において、あり、ややありが最も多く、80%を超えていた。こどもの理解度については、あり、ややありが55%であった。年齢別でみると、2歳児では、ありは0で、ややありが22%と低くなっていたが、3歳児以上では、年齢による違いは見られず、60%程度があり、ややありであった。子ども健康手帳の内容の妥当性については、約75%があり、ややありであった。年齢別でみると、2、3歳児にあり、ややありが多かった。

「子ども健康手帳」に対する意見は、内容に関するもの、デザインに関するもの、活用方法に関するもの、効果に関するもの、配布時期に関するものに分けられた。母子健康手帳との差別化、医療機関との連携、集団教育での活用などの意見が得られた。

2) 保育士の「子ども健康手帳」に対する評価

「子ども健康手帳」の健康教育の妥当性については、全員が、あり、ややありであった。内容妥当性については、あり、ややありが約80%であった。活用可能性については、あり、ややありが約65%であった。子ども健康手帳についての意見については、成長曲線などが入っているとよい、メンタルヘルスについての記載があったらよい、シール付きだとよいなどがあった。

6．考察

これらの結果から、子ども健康手帳の内容の充実度や、活用可能性は高く、子ども健康手帳の有効性は確認された。しかし、今回の対象児の年齢が低く、理解度や興味の程度は低かったことから、対象年齢の検討が必要である。また、自由記述より、ヘルスケア教育や活用の難しさの意見があったことから、「子ども健康手帳」を用いた、幼児期の子どもに対するヘルスケア教育を検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 服部淳子、柴邦代、汲田明美、岡崎章
2. 発表標題 健康教育のための「子ども健康手帳」の開発
3. 学会等名 第67回 日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 服部淳子
2. 発表標題 これからのプレパレーションとは 子どもの主体のプレパレーションをめざして
3. 学会等名 第7回日本小児診療多職種研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

子どもの心理に対応したプレパレーションと評価 https://feeling.mystrikingly.com/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡崎 章 (AKIRA OKAZAKI) (40244975)	拓殖大学・工学部・教授 (32638)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡崎 慎治 (SHINJI OKAZAKI) (40334023)	筑波大学・人間系・准教授 (12102)	
研究分担者	柴 邦代 (SHIBA KUNIYO) (40413306)	日本福祉大学・看護実践研究センター・客員研究所員 (33918)	
研究分担者	前田 留美 (RUMI MAEDA) (60341971)	東京医科大学・医学部・准教授 (32645)	
研究分担者	汲田 明美 (AKEMI KUMITA) (80716738)	愛知県立大学・看護学部・講師 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関